平成２８年度教育事業

伊予の伝承文化を学び伝えるリーダー村

参加した大学生は、最初の２日間でリーダーシップや子どもへの接し方、集団作りの技法、竹細工といった伝承文化について学びました。後半の日程では、小学生が参加する「子どもむかし生活体験村」の企画と運営を担当しました。４日間、小学生とともに過ごす中で、リーダーとしての資質を身につけました。また、活動を通して伝承文化を小学生に伝えました。

１．事業実施までの経緯

本事業は当所でのこれまでの体験活動が自然体験活動中心であったことや、日本では自然と生活文化が一体化していると思われること、日本の伝承文化を理解し、それを継承していこうとする意識が希薄化していること等から、自然と文化の融合体験及び地域に根ざして活動するリーダーを養成することを目的として、平成１９年度より国立大学法人愛媛大学との共催事業として始まり、平成２５年度からは法人ボランティア養成事業として実施している。回数を重ねる中で伝承文化のテーマを変更したり、日程を変更したり、事業の質を高めるべく改革を行ってきたが、今年度の実施で１０回目を迎えることから、節目にふさわしい改革を行うべく、前年度から愛媛大学側と協議を重ね今年度の企画を立案した。

今年度は、大学生参加者を３つの区分に分け、初年度の参加となる通常クラス、２回目の参加となる上級クラス、３回目以上の参加となるアドバンスクラスを設けた。これは参加回数に応じた学びが得られるように工夫を加えたもので、通常クラスは他の参加者との協働する力を、上級クラスは課題発見能力を、アドバンスクラスはマネジメント能力を養成できるようにそれぞれの役割を明確にして事業を実施した。特にアドバンスクラスは、準スタッフ的な立場で事業全体の運営をサポートし、通常と上級クラスの大学生にアドバイスを与えることから、２０１５年の中央教育審議会答申で示された教員養成課程の変革に対応した形となっている。参加する大学生の意識を高めるため実施３週間前に当所の担当者、愛媛大学の担当者を講師に、大学生対象の参加者講習会を実施した。小学生の参加対象は、昨年度に引き続き４～６年生とした。小学生の広報の範囲は愛媛県中予・南予地区全域とし、幅広い地域からの参加者を募った。これは、子どもたちが初めて出会う友人と、普段あまりできない異年齢集団での生活、遊びを経験してもらいたいと考えたためである。

また、日程については昨年度に引き続き、大学生も小学生も学んだことを充分にふりかえることができるよう５泊６日の事業とした。

以上の点を考慮しつつ、関係機関と連携しながら、今年度の事業を進めた。

２．ね　ら　い

地域を大切にし、地域に根ざして活動するリーダーが求められている中で、愛媛の伝承文化を学び、先人の知恵と自然体験の融合した体験活動をすることで、地域を大切にしようとする心を育むとともに、「子どもむかし生活体験村」を自ら計画し、運営することで、地域に根ざして活動しようとするリーダーを養成する。

３．主　　催

独立行政法人国立青少年教育振興機構　国立大洲青少年交流の家
国立大学法人　愛媛大学

４．後　　援

［後援］愛媛県教育委員会　西予市教育委員会　大洲市教育委員会
ＮＨＫ松山放送局　あいテレビ　愛媛新聞社
［協力］西予市野村町惣川「土居家」

５．期　　日　平成２８年８月２２日（月）～２７日（土）
※大学生を対象とした参加者講習会を７月２８日（木）に実施
※子どもむかし生活体験村は８月２４日（水）～２７日（土）に実施

６．場　　所　国立大洲青少年交流の家　２２日（月）～２３日（火）、２６日（金）～２７日(土)
西予市野村町惣川「土居家」　２３日（火）～２６日（金）

７．参加人数　大学生１６名　（募集人数１５名）
〔子どもむかし生活体験村　小学校４～６年生１９名（募集人数２０名）〕

８．講　　師
岩本　康孝　氏（大洲市立喜多小学校主幹教諭）
小野　翠　氏　（内子町八日市・護国町町並保存センター学芸員）
犬伏　武彦　氏（元松山東雲短期大学特任教授）
大本　敬久　氏（愛媛県歴史文化博物館　専門学芸員）
西予市野村町惣川地区の方々
山﨑　哲司　氏（愛媛大学教授）
日野　克博　氏（愛媛大学准教授 ）
髙橋　平徳　氏（愛媛大学講師）
国立大洲青少年交流の家　職員

【大学生向けチラシ】
『伊予の伝承文化を学び伝えるリーダー村』
２０１６年８月２２日（月）～２７日（土）
※５泊６日

【小学生向けチラシ】
『子どもむかし生活体験村』
２０１６年８月２４日（水）～２７日（土）
※３泊４日

９．日　　程

7/28（木）	16:30	18:30											
								参加者講習会		※愛媛大学で実施			
	9:30	10:30	12:00	13:00		15:30	16:30	17:30	19:30	20:30		21:00	22:00
8/22（月）		受付	開講式	**（演習）アイスブレイク**	昼食	**（演習・実習）竹の遊び道具・うちわづくり実習と安全管理**	**（講義）現代の教育**	**（講義）リーダーについて**	夕食・入浴	**（講義）子どもとのかかわり方**	役割分担	情報交換会	就寝
	9:00	11:00	12:30	13:30					17:30	19:30			22:00
8/23（火）		**（講義・演習）伊予の伝統建築と伝統工芸**	（バス移動）土居家へ	昼食	**（演習）現地確認安全対策**	**（演習）プログラム計画**	**（演習）役割分担運営準備**		夕食・入浴	プログラム計画・運営準備、			就寝
	8:30	10:30	12:00	13:00		14:30			17:30	19:30		21:00	22:00
8/24（水）		受入準備開村式準備	開村式	仲間づくりゲーム	昼食	（講義・演習）愛媛の民俗文化について	（活動Ⅰ）竹食器・竹箸づくり竹の遊び道具づくり		夕食・入浴	（活動Ⅱ）班活動目標づくり		打合せ企画会	就寝
	9:00	12:00	13:00						18:00	20:00		21:00	22:00
8/25（木）		（活動Ⅲ）うちわづくり		昼食	（活動Ⅳ）リーダーズプログラム①				夕食・入浴	（活動Ⅴ）リーダーズプログラム②		打合せ企画会	就寝
	9:00	12:00	13:00		15:00	15:15		17:00	17:30	19:30		20:30	22:00
8/26（金）		（活動Ⅵ）うどんづくり		昼食	土居家清掃、片付け	土居家退家式	（バス移動）交流の家へ	入所	夕食・入浴	思い出発表準備①		ふりかえり	就寝
	9:00	10:00	11:00	12:00									
8/27（土）		思い出発表準備②	思い出発表閉村式	ふりかえり閉講式	大学生解散								

※太字は法人ボランティア養成講座部分

10. 活 動 内 容

〈開講前【７月２８日（木）】〉愛媛大学

「参加者講習会」（１６：３０～１８：００）

講師：山﨑　哲司　氏（愛媛大学教授）、日野　克博　氏（愛媛大学准教授）
国立大洲青少年交流の家　職員

本事業に応募した大学生を対象とした参加者講習会を愛媛大学にて開催した。事業に応募した１６名の学生は愛媛大学１４名（教育学部８名・医学部看護学科４名・他学部２名）と、松山東雲女子大学２名（人文科学部心理子ども学科）であった。講習会では、初め当所の担当者が法人ボランティア制度についての説明を行い、引き続き本事業の概要やねらいについて紹介した。続いて昨年度の参加者であり、今年度についてはアドバンスクラスで参加する教育学部の大学院生から、事業の概要および注意点についてのプレゼンが行われた。実際にどのような場面で葛藤し、活動が終わった後自分にどんな変化があったか、それぞれが自分の言葉で熱弁を振るった。最後に愛媛大学の山﨑先生から参

加者に対し、激励と望ましい参加態度についての講話があった。

〈第１日【８月２２日（月)】〉国立大洲青少年交流の家
「アイスブレイクの手法」（１０：３０～１２：００）
講師：国立大洲青少年交流の家　職員

大学生参加者の緊張をほぐし、また３日目から始まる「子どもむかし生活体験村」で最初に行われる「なかまづくりゲーム」での指導方法を学んでもらうため、グループワークゲームを実施した。例年は当所の職員が指導しているが、指導の一部を昨年度「なかまづくりゲーム」を中心になって企画・運営したアドバンスクラスの学生が担当した。それぞれのゲームの後にはふりかえりとして職員よりゲームの目的と注意点が紹介された。

「竹の遊び道具、うちわづくり実習と安全管理」（１３：００～１５：３０）
講師：国立大洲青少年交流の家　職員

大学生参加者は、小学生参加者に竹細工を指導する立場となるため、実際にうちわと竹食器を作成した。参加者は思い思いの図柄を描いた紙を､職員の説明を受けて丁寧にうちわに貼り付けた。グループに分かれてＫＹＴ(危険予知トレーニング)を受けた後、竹食器作りを行った。この作業は小刀や鉈などの刃物を使用するため、より細かに作業手順と怪我をさせないための注意点が職員から伝えられた。最後にまとめとして、職員から安全管理の考え方について説明があり、参加者はリスクマネジメントの考え方を学んだ。

「現代の教育」（１５：３０～１６：３０）
講師：山﨑　哲司　氏（愛媛大学教授）

山﨑先生から主体的な学びである「アクティブラーニング」について大まかな説明があった後、知識に基づいた学びがどのようなものか、参加者に課題が与えられた。それぞれ暦の課題や天体運行に関する課題であったが、最後にグループで同じ課題に取り組むと、それぞれの知識が活用できるという趣向の凝った学びであった。昨年度は事業の４日目に行われたナイトハイクの際、月明かりが眩しすぎて星空の観察に適していなかったが、今年度は月が昇るのが夜半過ぎであると分かるような課題であった。参加者はペアグループ学習を通してアクティブラーニングに必要な協働について理解するとともに、子どもと歩く惣川の夜に期待を膨らませたようであった。

「リーダーについて」（１６：３０～１７：３０）
講師：日野　克博　氏（愛媛大学准教授 ）

日野先生により参加者同士の学び合いを促進するためのアイスブレイクが行われた後、リーダーについてのイメージマップを参加者それぞれが作成した。この事業は地域に根ざしたリーダーの育成がねらいであり、事業の前後で参加者のリーダー像がどのように変化したのか調査している。続いてリーダーとリーダーシッ

プの定義やリーダーの機能といった概念の説明から、上手なほめ方やしかり方といった具体的な説明へと進んだ。最後にリーダーに関する多くの格言が紹介され、この事業を通してそれぞれのリーダー像を明確にし、自分なりの格言を作り出すことが課題として示された。

「子どもとのかかわり方」（１９：３０～２０：３０）

講師：岩本　康孝　氏（大洲市立喜多小学校主幹教諭）

小学生との生活体験を控えて、小学生への接し方とグループのルール作りや目標作りの手法について、岩本氏から講義いただいた。初めて出会う小学生との生活は、「構成的グループエンカウンター」と言える。この偶然の出会った集団が感情を交流させ自分についての理解を深めてお互いに成長する集団とするために、いかに集団のルールと目標の設定が必要であるか説かれた。

また、発達障害を持つ子どもへの接し方についても「自分でもできたという実感をもてる手助けをする」「しんどくなったらグループを離れさせる」など具体的な手法が紹介された。

最後に、岩本氏が勤務校で使用している「リフレーミングカード」が紹介された。これはカードの表に書かれた特徴も、見方を変えれば裏に書かれた特徴と対であることが簡単に理解できるカードである。子どもの短所に注目して注意を与えるのではなく、長所を見つけてほめることが基本であると伝えられた。

〈第２日【８月２３日（火）】〉国立大洲青少年交流の家

「伊予の伝統建築と伝統工芸」（９：００～１０：３０）

講師：小野　翠　氏（内子町八日市・護国町町並保存センター学芸員）

子どもむかし生活体験村で過ごす「土居家」は西予市の重要文化財である。また、事業４日目の夜にナイトハイクで使用する和蝋燭は、内子町でいまだに手作りで生産されているものである。内子町の和蝋燭で財をなした上芳我家は国の重要文化財に指定されており、事業に向けて伝統建築と和蝋燭について参加者に理解を深めて貰うため、内子町でのフィールドワークを行った。

最初に和蝋燭を生産している「大森和蝋燭屋」を訪れ、店員から和蝋燭の作り方や扱い方について説明を受けた。続いて「上芳我家」に移動し、小野氏の案内で伝統的家屋の特徴について見て回り、付属の資料館で内子と和蝋燭の関わりについて詳しく説明を受けた。最後に菜種油と和蝋燭、パラフィン蝋の違いを実際に灯されたもので確認し、明かりの移り変わりについて理解を深めた。

「外あそびの安全管理」（１３：３０～１５：３０）

バスで惣川に移動し、４日間お世話になる「土居家」を管理する地元の方々に挨拶を済ませた後、土居家併設の食堂「蔵」で少し遅めの昼食となった。休憩後、「リーダーズプログラム①」の検討に入ったが、当初予定していた村内のウォークラリーを実施するには日中の気温が高すぎ、熱中症の危険が高いという意見が出された。急きょ、昨年度の内容である三島神社境内での昔遊びと親水公園での川遊びに変更し、現地踏査に出発した。約２キロの道のりを大学生リーダーが小学生を徒歩で引率する形になるため、実際に歩いてコースを確認するとともに、神社境内や親水公園での危険個所の確認を行った。途中、入浴場所である「野村少年自然の家」やふりかえりやうどんづくりの場所である「天神集会所」へそれぞれ立ち寄り、村内の位置関係を全員で確認した。

「外あそびの組み立て方」（１５：３０～１６：３０）

土居家に戻った後、現地踏査の結果を踏まえてプログラムの内容について、大学生リーダーが意見を出し合った。上級クラスのリーダーが議論をリードし、アドバンスクラスのリーダーがアドバイスをする形で話し合いが進んだ。

「大学生リーダーの役割」（１６：３０～１７：３０）

プログラムの内容が決まった後で、日野氏や岩本氏の講義で示されたリーダーの機能や立ち振る舞い、集団を機能させるための仕掛けについて再確認し、初日の学びを振り返った。続いて、プログラム実施場面ごとの役割分担と注意点が話し合われ、全体の流れと各リーダーの動きを確認した。

「プログラム計画・運営準備」（１９：３０～２２：００）

夕食後、翌日から始まる「子どもむかし生活体験村」の「村の掟づくり」が行われた。この掟は起床後のつどいや、食事の度に全員で唱和するものである。生活班ごとに分かれたリーダーで話し合った意見を全体で集約し、最終的に５つの掟を定めた。掟を半紙に清書した後は、生活班ごとに明日迎える小学生のプロフィールを確認し、食事や体調管理上の留意点について情報を共有した。残った時間は、リーダーズプログラム以外の活動について担当班ごとにリーダーが集まり、少ない時間で役割や準備物の確認を行った。

〈第３日【８月２４日（水）】〉西予市野村町惣川『土居家』

「『子どもむかし生活体験村』開村準備」（８：３０～１０：３０）

前日夜に終わらなかった役割分担について話しあった後、小学生を出迎えた後の流れについて確認を行った。最初の活動である「なかまづくりゲーム」は、緊張した初対面の小学生を安心させる重要な時間であるので、担当リーダーを中心に入念なリハーサルが行われた。予定時刻に小学生を乗せたバスが土居家近くの広場に到着し、少し緊張した面持ちの小学生を、大学生は努めて笑顔で出迎えた。

「子どもむかし生活体験村」開始（１０：３０～）

「仲間づくりゲーム」（１１：００～１２：００）

子どもむかし生活体験村への参加にあたって、「兄弟や友人との参加不可」というルールを設けている。これは新しい人間関係を様々な活動や共同生活をとおして築いてもらうことで、コミュニケーション能力の向上を狙っているからである。実施した「なかまづくりゲーム」は、初日の活動で大学生リーダーが経験したアイスブレイクを担当リーダーが自分たちなりにアレンジしたもので、前半は多少ぎこちなさが見られたが、活動が進むにつれて全員に自然な笑顔が広がった。

「愛媛の民俗文化について」（１３：００～１４：３０）

講師：犬伏　武彦　氏（元松山東雲短期大学特任教授）

　　大本　敬久　氏（愛媛県歴史文化博物館　専門学芸員）

西予市の重要文化財である「土居家」は、伊予と土佐を結ぶ街道の宿場町として栄えた惣川の庄屋屋敷として文政１０年（１８２７年）に建築されたと伝えられている。傷みの激しかったこの屋敷は平成１０年に現在の形に修復され、西予市の重要文化財に指定されたが、その復興に尽力されたのが犬伏氏である。犬伏氏からは復興当時の様子を撮影した写真とともに、当時の思い出やその文化的価値が参加者に伝えられた。犬伏氏を補足する形で、大本氏から土居家の建築的特徴について説明が加えられた。屋敷内を巡りながらその特徴を理解することで、参加者はなお一層、ここで生活体験することの重みを再認識したようであった。

「竹食器・竹箸づくり、竹の遊び道具作り」（１４：３０～１７：３０）

講師：西予市野村町惣川地区の方々

大学生リーダーが小学生に伝える伝承文化の一つに竹細工がある。地元惣川地区の方々に指導いただき、土居家前の広場で竹食器を作成した。この竹の器と箸は、翌日の昼食で振舞われる流しそうめんを食べるためのものである。大学生リーダーは２日目の安全管理講習で自分たちの竹食器を作成して､作業の手順と怪我をしない道具の使い方を確認しており、担当班の小学生をそれぞれが指導した。中には工作が苦手で諦めかける小学生もいたが、上級クラスとアドバンスクラスのリーダーが根気強く指導することで、全員が時間内に竹食器の作成を終えた。また、この時間に惣川地区の方々に作って各班一つずつ作っていただいた竹馬は、空き時間に大学生リーダーと小学生参加者の交流を促進する大切なアイテムとなった。

「班活動・目標づくり」（１９：３０～２１：００）

夕食と入浴を済ませた後、班ごとに目標の作成に取り掛かった。村の掟は小学生参加者と出会う前に大学生リーダーが決めているが、班ごとの目標は班のメンバーが揃った後に決める。この共同生活が終わる土曜日に集団としてどうなっていたいか、ゴールを想像しての目標決めである。ここでも岩本先生の講義内容が生かされており、大学生リーダーは押しつけにならぬよう、苦労して小学生から言葉を引き出して目標を書き出した。各班からの発表が終わった後は、小学生参加者の生活ノートへの記入や寝具の準備をそれぞれのリーダーが役割分担に基づいて指導した。

〈第４日【８月２５日（木）】〉西予市野村町惣川『土居家』、三島神社周辺

「うちわづくり」（９：００～１２：００）

竹食器づくりに続いて、大学生リーダーがうちわの作り方について指導した。この活動は講師がおらず、大学生リーダーが初日の安全管理講習で学んだ経験を元に指導をしなくてはならない。ここで作るうちわは熱中症対策としても大切だが、共同生活が終わった後に持ち帰ることができる数少ないお土産の一つである。班の仲間意識が高まりつつあるのか､班員の名前を入れたデザインを多く見かけた。

「リーダーズプログラム①」（１３：００～１８：００）

この日の日中は快晴で非常に気温が高く、木陰の多い神社の境内や川遊びにはうってつけの天候となった。２日目の現地踏査で確認した危険個所に留意しつつ、稲刈りが進む秋めいた惣川の風景を楽しみながら、班ごとに三島神社まで移動した。現地に到着し水分補給を済ませた後、境内をつかった「むかしあそび」が始まった。大学生リーダーが準備したあそびはどれも年齢に関係なく、同時に沢山の相手と交流できるものばかりで大いに盛り上がった。

むかしあそびの後は、スイカ割りを挟んで親水公園での川遊びとなった。交流の家職員によるライフジャケットの着用方法とスローバッグのつかみ方について説明があった後、担当の大学生リーダーから川遊びについてのルール説明が行われた。川遊びができる場所として整備された場所ではあるが、小学生にとっては水深が深い場所もあったため、大学生リーダーは遊び役と監視役に分かれ、また水温が低いためにそれぞれの役割を交代で行った。川遊びが終わった後、参加者は体を温めるため帰路にある野村少年自然の家に立ち寄り、早めの入浴を済ませた。

「リーダーズプログラム②」（２０：００～２１：００）

土居家のパンフレットには「星ふるさと」というキャッチフレーズが掲載されている。土居家がある惣川地区は標高４００ｍほどあり、周囲には大きな町がないため満天の星空が望める。当日は雲一つなく、また山崎先生が初日の講義で出題した通り、月が上るのも夜半であったため、この時間は頭上に沢山の星々が煌めいていた。交流の家職員による星空講義の後、ナイトハイクに出発した。提灯に入っているのは、２日目のフィールドワークで訪れた内子の和蝋燭である。心もとない明かりを頼りに、各班は夜の惣川を探索した。コースは担当の大学生リーダー達によって決まっており、時には肝試しのような課題をクリアしながら進む趣向のこった内容が準備されていた。アドバンスクラスが見守るコース上をたどり出発した土居家に戻ると、ライトアップされた四国最大級の茅葺屋根が参加者を出迎えた。

〈第５日【８月２６日（金）】〉

西予市野村町惣川『土居家』、天神集会所

国立大洲青少年交流の家

「うどん作り」（９：００～１２：００）

講師：西予市野村町惣川地区の方々

昨年度までは野村少年自然の家の食堂を利用してうどんづくりを行っていたが、今年度から打ち合わせ場所として借りることができた天神集会所には、かまどなどの調理設備が整っていた。よって新たな試みとして、この集会所でうどんづくりを行った。以前の活動場所よりも手狭ではあ

ったが、真横にため池を望む絶好のロケーションの中、惣川地区の方々に指導いただいて、うどんづくりが進んだ。うどんづくりに使われた小麦粉は、講師を務めた方の田畑で栽培され、このうどんづくりのために製粉されたものであった。コシの強いうどんを作るため、小学生をおんぶした大学生リーダーが足踏みする光景があちこちで見られた。

「土居家清掃・片付け・退家式」（１３：００～１５：００）

大学生が３泊４日、小学生が２泊３日を過ごした土居家を、荷物の移動をしながら清掃を行った。予定よりも早めに片付けが進んだため、参加者は野村少年自然の家に移動し、短時間ながらむかしあそびを楽しんだ。お世話になった土居家の人々にお礼の挨拶をし、集合写真を撮影した後に土居家を後にした。

「思い出発表準備①」（１９：３０～２０：３０）

講師：国立大洲青少年交流の家　職員

交流の家に戻り、夕食と入浴を済ませた後、思い出発表の準備に取り掛かった。平成２６年度より日程を１日延長し、この思い出発表が行われている。それまでは惣川で小学生を大学生リーダーが見送る形であったが、どのような生活を送ったのか小学生の保護者にも知ってもらい、また参加者にもこれまでの活動をふりかえることで体験活動の効果を高めてほしいとの願いもあり、以来この形をとっている。各班で発表する活動を選び、その活動について発表する小学生の指導を大学生リーダーが行った。自分の考えを言葉にするのが得意な小学生とそうでない小学生との差が見られたが、アドバンスクラスの参加者がうまくフォローを行っていた。

「ふりかえり」（２１：００～２２：００）

講師：山﨑　哲司　氏（愛媛大学教授）、国立大洲青少年交流の家　職員

期間中、大学生リーダーは毎日予定されたプログラムを終えると愛媛大学職員もしくは交流の家職員とのふりかえりを行っていたので、この日が最後のふりかえりとなる。山崎先生からそれぞれのリーダー像がどのように変化したか問いかけがあり、それぞれが自分の言葉でリーダー像を語った。また交流の家職員から５日間を通したまとめのアドバイスが送られた。

〈第６日【８月２７日（土）】〉国立大洲青少年交流の家

「思い出発表準備②」（９：００～１０：００）

朝食後、思い出発表前最後のリハーサルを行った。小学生にとっては４日ぶりに会う保護者への発表ということもあり、前日の練習よりは緊張の色が濃いように見えたが、時間までにすべての班がリハーサルを終えることができた。大学生リーダーが最後の声掛けをし、託すような眼差しを送って小学生の元から離れた。

「思い出発表会」（１０：００～１０：３０）

担当大学生リーダーが司会を務め、思い出発表が始まった。前方から小学生参加者が班ごとに席から立って思い出を発表し、部屋の中央に座った保護者がそれを聞き、後方で大学生リーダーが見守るといった形で実施した。活動中はどこか頼りなかったり、不真面目な態度しかとれなかった小学生も、大学生リーダーとの打ち合わせどおりに堂々と発表を終え、４日間の成長を感じさせた。

「閉村式」（１０：３０～１１：００）

最後となる「村の掟」の唱和の後、村長として佐藤所長からの挨拶があった。今回特別な体験ができたことを感謝し、普段の生活に戻っても努力を続けてほしいと励ましの言葉が贈られた。司会の大学生リーダーが閉村式を締めくくろうとした時、小学生から大学生リーダーへのサプライズが行われた。前日夜に大学生がふりかえりを行っている間に練習した歌と、感謝の手紙が大学生に送られ、予期せぬ仕掛けに大学生リーダーだけでなく保護者の涙も誘い、４日間の共同生活が締めくくられた。

「子どもむかし生活体験村」終了

「ふりかえり」「閉講式」（１１：００～１２：００）

スタッフからの挨拶に続き、大学生リーダーがそれぞれ感想を述べた。大学生リーダーの感想は、通常クラスと上級クラス、そしてアドバンスクラスがそれぞれの学びを得たことをうかがえるものであった。閉講式の後、アドバンスクラスが残り、最後まで準スタッフ的な立場で会場や物品の片付けを交流の家職員と行った。

11. 参加者の声

参加者の事後アンケートの結果

【小学生】

＊満足：84.2%　＊やや満足：15.8%　＊やや不満：0.0%　＊不満：0.0%

○　とても楽しく４日間を過ごせて嬉しかった。（１０歳・女子）

○　今までしたことがないような、たのしい活動だった。（１１歳・女子）

○　ご飯もおいしくて、昔のくらしが分かったので楽しかったです。（１１歳・男子）

【小学生保護者】 ※実施３ヶ月後のアンケート調査への回答より

○　未体験のことでも「とりあえずやってみる」と言い出しました。以前はすぐ「イヤ！」だと言い「できない」ということもあったので嬉しい変化です。

○　自分の思っていることや考えをはっきり言えるようになりました。自信がついたからなのではないだろうかと考えます。

○　読書をするようになりました。グループのお友達が読書を好きだった様で、あこがれのお姉さんと同じことをしたいのかな？

【大学生】通常クラスおよび上級クラス

＊満足：100.0%　＊やや満足：0.0%　＊やや不満：0.0%　＊不満：0.0%

○　最初は不安や緊張・焦りがあったが、今では充実感や達成感でいっぱいだ。子どももそうだし、自分自身も成長できたと思う。今後もこの学びを行かして、頑張っていきたい。

○　はじめは大変で嫌になりそうだったけど、終えてみると充実した５日間であったと実感しました。今回、自分に大きな変化があったことに驚いています。

○　子どもたちといっしょにたくさんの楽しいことをしたり、時には反省することや悩むこともあったりしたが、全てを含めて良い経験だったなと思った。

【大学生】アドバンスクラス

＊愛媛大学職員による聞き取り調査での発言

○　マネジメントの部分をいろいろと見られた。裏方として行動することで、それぞれの活動について、その趣旨を考えて行動できた。

○　地域との関わりの重要性といった話は知っていたが、地域の方々のお話を直接聞いて、単に何かをしてもらうだけではなく、何を還元できるかなど、改めて考えさせられた。

○　２回生までにリーダー村に参加して「地域の人との協力」も体験したが、教員採用試験でもう一歩踏み込んで勉強すると、教育者の立場から学校として地域と連携することの大切さを学び、その後で交流の家の方々や地域の方々に話しを伺ったことで両方が結びつき、理解が深まった。

12. 成果と課題

【成果１】参加した大学生が成長し明確なリーダー像を持てたこと

この事業に参加した学生は、事業前と事業後に「社会人基礎力」の測定を行っている。どの学生も押し並べて数値が向上していた。社会人基礎力は「Ⅰ前に踏み出す力」「Ⅱ考え抜く力」「Ⅲチームで働く力」の３つで構成されているが、どの項目も参加者平均で３割前後の伸びを示した。特に「Ⅰ前に踏み出す力」の伸びが目立っており、同じ大学生リーダーとの話し合いや小学生との交流を通して意欲的になった様子がうかがえる。また、事後アンケートの自由記述には多くの大学生リーダーが「周囲を巻き込む」という言葉を使っていた。リーダー像が先頭に立って指示を出すものから、他者と協働しながら取り組むものに変化した学生が多くいたようである。

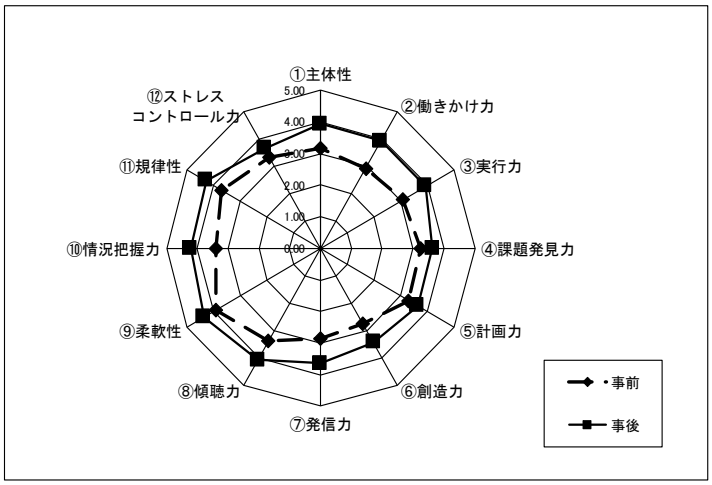

図１　社会人基礎力の変化

【成果２】参加した小学生にたくましさが身についたこと

本事業での体験が、小学生にどのような変化をもたらせたのかを調査するために、子どもむかし生活体験村に参加した小学生に対して「ＩＫＲ（生きる力）評定用紙（簡易版）」による調査を事業の前後に実施している。また、昨年度に引き続き小学生の保護者に対しても調査を実施した。下記のグラフのとおり、全ての項目において事業後にその数値が向上しており、小学生自身も保護者も少なからず変化を実感している。

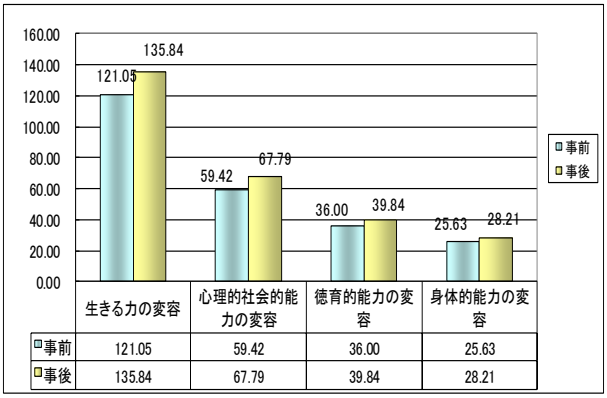

図２　ＩＫＲ評価用紙（小学生）評価結果

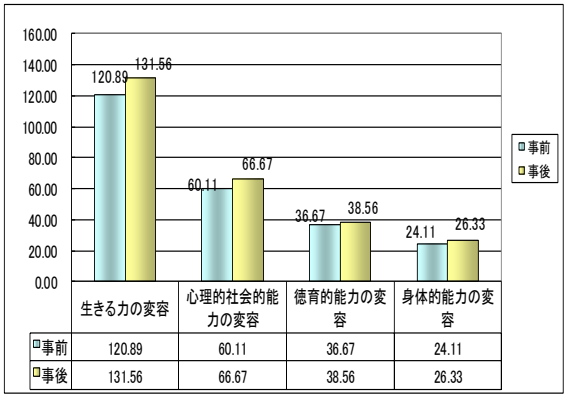

図３　ＩＫＲ評価用紙（保護者）評価結果

【成果３】１０年の節目にふさわしい取り組みができたこと

今年度の事業は、これまでの大学生の参加形態を大きく変えたものであった。事業実施までの経緯にあるように、大学生参加者を３つの区分に分け、参加回数に応じた学びが得られるように工夫を行った。この事業は西予市の地域社会と結びつきながら、小学生に身につけて欲しい資質能力を教育目標として掲げ、さまざまな生活体験を企画する事業である。それぞれの活動における目的を理解し、スタッフや地域社会の講師も含めたチームで動くことを意識しないと、この活動はうまく回らない。アドバンスクラスの参加者は、教育実習を終えた４回生以上の大学生であり、指導現場でも回りを観察する余裕が持てているからこそ、マネジメントの役割を果たすことができる。

この事業では大学生の成長を社会人基礎力で測定しているが、それぞれの区分において身につけてほしい能力を事前に説明しておくことで、参加者が自分の役割を自覚して行動できるようにした。

社 会 人 基 礎 力		通常	上級	発展
前に踏み出す力（アクション）	**主体性**　物事に進んで取り組む力	○		
	働きかけ力　他人に働きかけ巻き込む力	○	●	
	実行力　目的を設定し確実に行動する力	○		
考え抜く力（シンキング）	**課題発見力**　現状を分析し目的や課題を明らかにする力	○	●	◎
	計画力　課題の解決に向けたプロセスを明らかにし準備する力	○	●	◎
	創造力　新しい価値を生み出す力	○		
チームで働く力（チームワーク）	**発信力**　自分の意見を分かりやすく伝える力	○		
	傾聴力　相手の意見を丁寧に聴く力	○		
	柔軟性　意見の違いや立場の違いを理解する力	○	●	
	状況把握力　自分と周囲の人々や物事との関係性を理解する力	○	●	◎
	規律性　社会のルールや人との約束を守る力	○		
	ストレスコントロール力　ストレスの発生源に対応する力	○	●	

※●は上級クラスで特に重視する力、◎はアドバンス（発展）クラスで特に重視する力

【成果４】大学生の「ふりかえり」「わかちあい」の工夫を行ったこと

昨年度もこの事業を担当して気がかりであったのが、小学生が加わる３日目以降のふりかえりが不十分になっている点である。事業に参加した愛媛大学の高橋先生は経験学習がご専門であったため、毎日生活班のグループでふりかえりに使うワークシートを作成いただいた。前日のふりかえりシートに記した課題を評価し、翌日の課題を設定する方法は分かりやすく、大学生の成長を促すものであった。

【課題１】伝承文化を学び伝える工夫が足らなかったこと

今年度は内子町のフィールドワークを取り入れたが、子どもむかし生活体験村の指導に上手く生かせなかった。竹細工については、大学生が作り方を学び、小学生に作り方を指導し、出来上がった器を実際に使う流れがある。内子町で大学生リーダーが学ぶ伝統建築や和蝋燭に関する知識も、同様の流れを考えたい。

【課題２】惣川地区での学びが難しくなりつつあること

土居家のある西予市野村町惣川地区は、昔は交通の要所であったが今は高齢化の進む限界集落である。年々地元の講師を確保するのが難しくなっており、交流の家としても車で１時間ほどかかる場所まで資材や人を運搬する余裕がなくなりつつある。四国最大級の茅葺き古民家で寝泊まりできる体験は代えがたいものがあるが、生活体験の場所は変更を検討する時期に来ていると感じる。

（担当：企画指導専門職　来田　淳）